

甲斐星石論

— 古代甲斐王朝追求考 —

- ① 甲斐星石前考
- ② 甲斐鹵鹽考ろえん
- ③ 甲斐漢字考
- ④ 甲斐酒折宮考
- ⑤ 甲斐星石終考

犬飼和雄

① 甲斐星石考

甲府盆地の東端に星石と呼ばれている石がある。が、別に隕石とはなんのかわりがあるのではない。それなのに、どうして星石などと呼ばれているかといえば、その石の最初に見た人物が、その石の表面に小穴がちりばめられているのを見て星だと理解したからだろう。

ここでまずその星石の説明をすることにする。

その星石と呼ばれている石は、実は巨石であり、形は長方形である。

どれほど巨石かといえば、横一米三十センチ、縦三十五センチ、奥行三十センチ、その重さは四百キロである。

あらためていうまでもなく、かんたんには一人の人間が動かすことのできるようなものではない。

この巨石が現在どこにあるかといえば山梨県八代郡御坂町竹居の公民館前にガラスケースの中で展示されている。この公民館は盆地を取りまくように存在している曾根丘陵にある。

この巨石がどこから出土したかわかっていないが、これだけの巨石である。かんたんには移動できないし、まして利用価値がなくなったら、あった場所に放置されたにちがいない。

この公民館のある場所は曾根丘陵で、古代の甲斐の国が存在してもおかしくないところで、もしこの星石の中に、古代の甲斐を思わせるものがあつたら、この星石の出土は、この公民館の近くのどこかだということができる。

さてここで、この星石の内容に入ることにする。以前にこの星石には、星のような小穴がこの石の表面に散りばめられているといったが、この星石の表面には、字や絵がかかれていたのである。

しかもその字は文になっているし、絵はいわゆる絵ではなく、独特の個性的な絵になっているのである。したがって、この星石は、いわゆる星が中心ではなく、その文と絵が中心の石碑だということである。

まずその文の説明から入ることにしよう。

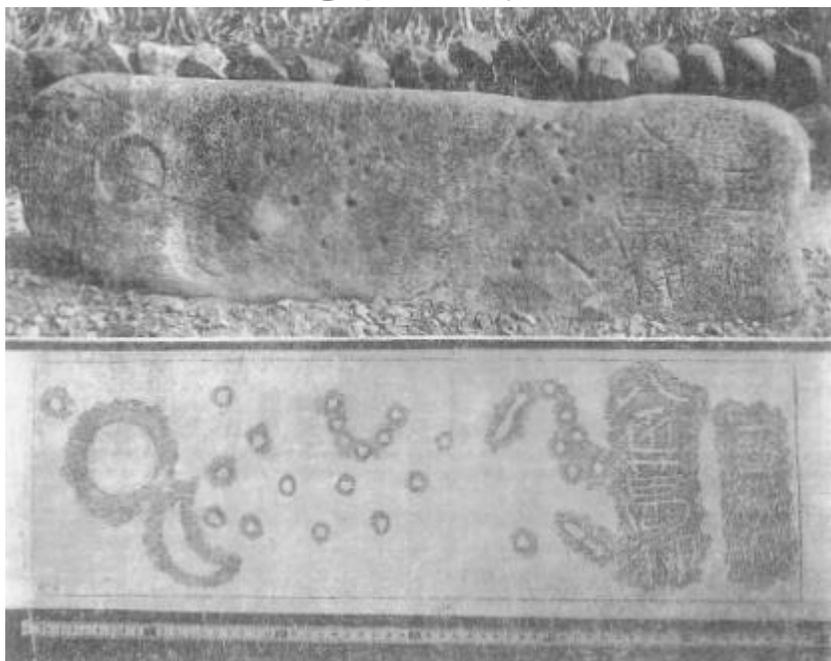
文はその石の表面の右側に二行で次のように彫られている。

一流禪道

八百万神

しかもこの二行の文字は、一行目が二行目に遠慮するように小さめである。わたしは最初にそれを見た時、なんの理由もつかない。それどころか、この二行の文の意味が見当もつかなかった。かろうじて想像できたことは、これは石碑なので、この地の王の思想をあらわしているのではないかということだけだった。

ただ全部漢字だったので、この石碑がなんのためにつくられたのかという問には、文や絵の意味がわからなければとしかいいようがないと思った。



その問題はさておき、この星石がどのように、どこでつくられたかを考えてみたい。この問題を追求していくと、この星石をつくった人物像がいやでも実像として浮きあがってくるからである。

まずこの星石を一見ただけでわかることは、これは自然石ではなく人によって自然石に手が加えられたものであるということである。

当然そこにはなん人も人の姿が浮びあがってくる。最初はこのような文や絵を石に彫ろうと思いたった人物である。当然このような人物は国王であろう。次にその国王はこのような文や絵がえがける長方形の石をけらいにさがさせる。けらいは山や川に入って石をさがす。なんとかそのような自然石をさがしあてると、その石を加工するための場所にはこぶ。しかしこれだけの巨石である。なん人も人間が必要であった。その場所に自然石の巨石をはこんだら、その巨石に、文や絵が彫れるようにしなくてはならない。彫るのはもちろん石工のような職人の仕事であるが、彫る文や絵をつくるのはそうした職人に行けるわけでない。文や絵をつくるのは、国王を中心とした人々である。

いずれにしても、こうした石碑をつくるには、大ぜいの人々がかかわっているのである。

さてこの星石の文や絵を理解するためには、この地に、つまり甲斐の東部のこの丘陵地帯に、どのような国があつて、そこにどのような国王がいたかを、まず知らなければならぬ。

わたしはこの問題にこれから入っていくが、それに先立って、この論文の副題として甲斐王朝ということばを使った。このことばをどうして使ったのか、前もって説明しておくことにする。

わたしは古代の甲斐に、古代の大和天皇家に相当する国が存在すると考えたからである。

② 甲斐鹵鹽考

塩山と名前の町が山梨県にあると知ったのは、わたしが山梨県に住むようになってからだ。でもその町名を知ったからといって、その町名にも、まして塩にもなんら興味をひかれなかった。ああ、料理の味つけに使われるものだと思うだけだった。

しかし、しだいに古代甲斐にひかれるようになったが、その中には塩が入ってこなかった。

そうしたある日、塩とは全く関係なく、甲府の古本屋で『甲斐国志』という三巻本を見つけ、何が書いてあるのだろうと手に入れた。まさか塩のことが書いてあるなど夢にも考えなかった。

その本は、松平定能という人が江戸末期にまとめた甲斐の歴史だった。まさか甲斐の歴史の中に塩があるとは、当時のわたしの頭ではとうてい思い及ばなかった。しかし家に帰って、『甲斐国志』をべらべらめくっていると、塩山という字がとびこんできた。ああ、塩山の町の歴史かと、わたしは塩山の説明を読みだし、わたしはしばし呆然となった。その文は次のようなものだったのである。

「鹽山」千野、於曾、鹽後、井尻、三日市場、五村ノ堺ニアリ古昔詣之五箇村、山ノ周圍壹里高拾町鹵鹽ヲ産ス囚テ為名しほの山又エンザントモ云乾隅に小鹽山又鹽川ト云モアリ

ここでシオの字にひとこと説明しておく、『甲斐国史』では説明のところではシオを本字の鹽を使い、和歌や歌ではしおの山のようにひら仮名を使っている。わたしはシオを略字の塩を使っている。

さてここで引用文の説明に入ることにする。山ノ周圍壹里というのは、しお山の周囲が四キロで、高拾町というのは山の高さが千メートルということである。もっともこのしお山の大きさはあてにならない。この本が書かれた江戸時代には、しお山はすでに存在していなかったからである。

この文でいちばん問題になるのは鹵鹽ということばである。最初塩は口に入れてハでかみしめるので、ハ塩というのかと鹵の字を理解した。しかしそれではわたし自身納得できなかったので鹵という字を調べたらとんでもない意味が漢和辞典にあった、字の発音が「ろ」で意味が岩塩だったのである。

さてこの塩山のこと『甲斐国志』の古蹟部にあれこれ記録されているのを見て、塩が記録に相当するだけの価値のある存在だとわたしは気がついた。

が、それだけでなく、『甲斐国志』に記録されている多くのしおの山の和歌や歌を見て、古代甲斐には国が存在していたのがわかった。これからその和歌や歌を記することにする。

雪ふればみやこのうちもよもながら

みなしほ山のこちこそすれ

和泉式部

冬の夜の有明の月もしほの山

さしいでの磯にちとりなくなり

従二位家隆卿

しほの山さし出のいその明かたに

友よふたつの声きこゆなり

後徳大寺左大臣

このような和歌が『甲斐国志』には二十近く書かれているが、平安時代には大和の都から、都人が大ぜい甲斐に行っていたことが、この三つの和歌からもわかる。

古代甲斐に大和と同じような国が甲斐にあったことは、次の『梁塵秘抄』の二つの歌からもわかるのである。

『梁塵秘抄』という作品は、平安時代、大和の都で歌われた歌を、後白河上皇が集めたもので、ほとんどが都の仏教や神教に関するものであった。それだけに東国の甲斐の歌はめずらしいものだった。甲斐の塩が大和の人々を甲斐に引きつけたのであろう。その歌の一つは、次のようなものである。

甲斐にかしき山の名は白根波埼鹽の山

室伏柏尾山篠の茂れるねはま山

この歌を見てわたしが理解したことは、しおの山はさておき、わたしの知らない山まで当時の大和の都の人々は歌にしてうたっていた。少なくともこうした山が甲斐にあることを知っていたに違いない。先の和歌を含めて、想像以上に当時、大和の都の人々は甲斐と交流していたし、しおの山のしおを利用していたと考えられる。又次の『梁塵秘抄』の歌を見ると、この歌は『甲斐国志』にはないが、甲斐には大和の都に比敵するような町があったのではないかと思わせる。

甲斐の国より罷り出でて信濃の御坂をくれくれと遙々と 鳥の子にしもあらねども 産毛も変はらで帰れとや

どうやら古代甲斐は二つにわけられる。独立国としての古代甲斐国と大和天皇家に支配された甲斐国とである。しおの山もそうである。先にあげた和歌や歌は、甲斐国が大和天皇家に従属した時代のものと思われる。

なお甲斐の岩塩についてのいちばん古い記録というのは、『先代旧事本紀』である。

この作品はいろいろの点で信頼されていないが、塩について書かれている部分は、その塩がそこに存在していたと信じてよいだろう。この作品がつけられたのは、平安初期だといわれている。そこに次のように書かれている。

甲斐国造まゐきのひしろみかどの世に：塩海足尼しほつみすくねをもて、国造こくのみやつくに定め賜ふ。

冒頭の纏向日代の世とは、十二代景行天皇の治世で、ヤマトタケルノミコトが甲斐の酒折宮で御火焼之老人と酒折宮問答歌をかわした時である。

それはともかく、この甲斐の国造の名前に塩という字が使われている。これはもちろん甲斐の塩山がわかっていたからである。『先代旧事本紀』には国造の名が百二十五書かれているが、名に塩が入っているのは甲斐だけである。甲斐の塩の山が古代からその存在を知られていたばかりでなく、そこに、というのは、甲斐に国があったことがわかる。岩塩があるところに国があるというのは、次の作品でわかるのである。

それは、『塩鉄論』である。

この作品は中国の漢の国で紀元前百年近く前に桓寛という人物によって書かれた塩の専売に関するものである。その中に次のように書かれている。

塩・鉄の専売、均輪こそ、蓄積した賤貨を流通させ、急場の必要に間に合わせるものです。

この塩と鉄以外にも酒も専売にしたとされているが、それはともかく、このようなものを専売にしてというのは、民衆に売り、その金で漢という国がなりたっていたのである。

おそらく日本でも、いや、甲斐でも塩の山があったので、中国と古くから交流していたので塩の専売制度により、甲斐に古くから国を作っていたのだと思われる。どのように古代国家を作っていたかこれから明らかにしていく。わたしは塩が甲斐にあったので、古代に、大和以上の国が甲斐につくられていたのでないかと考えている。

③ 甲斐漢字考

星石には文字が、文といってもよいが、漢字で彫られている。その字をそれなりに理解するために、甲斐の古代に漢字がどのように使われていたのかを知らなければならぬと考えている。

わたしはこの甲斐ではずいぶん昔から中国文字が使われていたのを知っている。そのいきさつをこれから述べることにしよう。

それは一枚の銅鏡からだった。

その銅鏡というのは明治時代甲府盆地の西南にある三珠町の狐塚古墳から出土したものである。その銅鏡に多くの中国文字がえがかれていた。しかし甲斐にとって、というより、日本にとってというべきかもしれないが、いや、わたしにとってもかもしれないが、そのうちの四文字、赤鳥元年という文字が衝撃だった。一瞬わが目を信じられなかった。

こんな年号をもった銅鏡が、甲斐の古墳から出土したなんてである。

赤鳥元年というのは、三国時代の呉の国の年号で、西暦二二八年である。しかも日本にはこのような年号のえがかれた銅鏡はこれ一枚しかない。字がえがかれた銅鏡といっても三枚ぐらいしかないのである。

しかも赤鳥というと古代中国語で太陽である。呉の皇帝孫権は、自分が太陽の申し子だと信じていたので赤鳥という年号を作ったと『三国志』に書かれている。

この赤鳥元年鏡が甲斐の古墳から出土したが、日本ではただ一枚であるという事実がわかると、甲斐の古代にある特別な、というののは、太陽鏡を必要とする人物がいて、その人物がわざわざこの銅鏡を作りよせたのだとわたしは考えずにはいられなかった。

わたしはすでに甲斐に塩の山が、岩塩があったから古代の甲斐に、古代の大和に匹敵するような国が存在したと述べたが、当然その国にも大和の天皇に相当するような国王が存在したと考えてよいだろう。

もつとも、甲斐の古墳から赤鳥元年銅鏡が出土しただけでも、古代の甲斐に漢のような古代王朝が存在したと考えてもおかしくないのだが、この話は、さらに他方面からもつづけることができる。

いずれにしろ、古代甲斐人は中国文字を中国人と同じように読むことができたし、甲斐人というより、大和人独自の読み方ができたのだ。それがどうしてわかるかといえば、次の『甲斐国志』の記事によつてである。次の記事は『甲斐国志』の記事なので、もちろん甲斐についてのものだが、当時の大和にも同じものがあつたことはいまでもない。

古蹟部というところに、次のように書かれている。古蹟部というのは古代ということで、この作品が作られたのは江戸時代なので、江戸時代から見て古代ということである。

〔学校址〕諸国ニ在ルヲ国学ト云教授^ニ學生^ニ上国ニハ學生四十人ナリ：天智帝ノ御時諸国ニ学校ヲ建テラレ：古今の典籍ヲ備へ学校田、観学田ヲ寄セラレ志アル者ハ入りテ物学ビヲ成サシム：学校モ衰廢^ニ及ビタリトナン。

この文を解説すると、国学という学校が各国にあつて、生徒は四十人ほど。天智天皇の時に各国につくられたというが、六百年代のことである。なお古今の典籍というのは、この六百年代にはまだ本らしいものはなかったので、ほとんどが中国のものである。おそらく日本の、倭国のもを書いた『三国志』などであろう。古代甲斐人は一部の人たちだが、『三国志』の倭人伝ぐらひは読んでいたにちがいない。

さてその『魏志倭人伝』だが、女王の名前を倭人が語る場合、倭人は文字がなかったので、ことばで「ヒミコ」と伝えた。その倭人のヒミコということばを中国人が「卑彌呼」と書き、倭人も女王を卑彌呼と書くようになったにちがいない。

このいきさつが、日本における、古代甲斐における王を、卑彌呼と書いたにちがいない。

いずれにしろ、二二八年に作られた中国の呉の国の赤鳥元年鏡がたった一枚だけ、古蹟時代の甲斐にもたらされたのだ。ということは、そんな甲斐に、そんな銅鏡が作られたのを知り、それをとりよせることのできる人物が、甲斐国に存在していたということだ。その人物が甲斐国王以外には考えられないが、今ここで問題にしたいことはそういうことではなく、現在の甲斐に残存している中国文字、漢字をどう読むかである。

その文字がどこにあるかといえば、酒折宮の裏山である。その山は『甲斐国志』によれば、御室山と呼ばれている。御室山というののは、王宮のある山ということである。もちろん古代甲斐の王宮であるが、この山を中心に多くの岩室、古代甲斐人の住居の記録が『甲斐国志』に残されている。石で作られたその古代甲斐人の住居は、江戸時代になつても利用されていたと思われ、『甲斐国志』の岩室の説明

はそれなりにリアリティーがある。その大きさを見るに、家族の住居ではなく一族の住居であったようだ。

一、石室・上岩下村、村内二拾五ヶ所アリ凡ソ石室ハ皆南向キニ作レリ地形ニヨリテ希ニハ東向ノ者モアリ洞口八九尺大小アリ三方石ヲ疊ミテ壁トナス入ル事七八間或四五間巨石三四校ヲ以テ蓋トス其石長貳間許幅五六尺許厚准之容易ニ動力スベキ者ニ非ス他ニアル処大抵斯ノ如シ一々具列セズ其内夕狩沢二二場アルヲ上人窟ト云昔一道人年来此二籠居シテ終リシ故ニ名トスト云落合村ニ五輪石塔、卒土原、大波院、堂場、塚田、立石、等ノ地名アリ桑戸村ニ金塚ト云アリ皆石室、廃寺ノノ迹ナルベシ古事ヲ伝ヘズ

これはいづれも酒折宮と其の背後の御室山を中心とした地域で、その他にも石室の記録はこの地域に見られる。ということは古代においては、この地域に古代甲斐国の中心があったのだということ、この『甲斐国志』の記録だけからもうかがえるが、それがどんなものであったかまではわからない。

さてその本題に入る前に、もう一つ古代に使われていた字について述べることにしよう。それは土人という字である。わたしはこの土人を見た時、ドジンと読んで南方の原住民かと思った。しかしこの土人の字があったのは、『日本書紀』や『甲斐国志』である。そのドジンであるはずがなかった。わたしはしばらく土人の読み方がわからなかった。それでもしばらくしてわかった。クニビトと読むのだということが判明した。大和が征服した国を土といい、その人を土人といったのである。

ここからいよいよ本題に入る。

現在の酒折宮から裏の山御室山の山頂に登っていくと、山道らしいものはなく、ただヤブをわけて登っていくだけだが、そのヤブに埋まったひとかえもある石に、漢字を彫りこんだ石が、わかるだけで三つ存在している。その石のある場所は、山の入り口にあたるものが二個、山の裏側に一個である。一つだけは山頂にあり、草にもまれてなかった。

山の入口に相当する二個の石のうち、一字の石は光という字とわかるが、もう一個の石は四字ほどで字とはわかるがなんの字かわからない。山の裏の字は境となっている。山頂の字は埤だった。

いずれにしるこういう石に彫まれた、それも時間がたつて読めなくなるほど風化しているのを見れば、甲斐の古代に彫られたのだとわかる。その光という字を見れば、甲斐の古代に国家が存在し、太陽を神としてうやまつていたのかと考えられる。

その答えとなるのが、最後に残った一文字である。

その一文字は「埤」である。この字が山の頂上にあるだけで、このおかれた意味がちがうと考えられる。他の石より重要な意味をふくんでいると考えられるのである。

それならこの埤の中にどんな意味があるのだろうか。他の字は光とか境でよく見なれている字である。ところが山の頂上の字は、わたしたちの見なれないものになっている。おそらくこの字をここにおいた人物が、この字を一字で作っておいだしたと思われる。

どのように作ったかといえば、まず土というつくりである。この土は文字通りクニをあらわしている。つまり古代甲斐王朝そのものが、この山そのものだと告げているのである。その右にあるのが卑、ヒ、つまり太陽で、この国の王だと告げているのだ。おそらくこの甲斐王は、この頂上の平地に居を構えていたのであろう。だがわたしがいいたいのはそういうことではなく、漢字をこのように日本人が、古代の甲斐人が利用することができたということである。光という山の石文字も、とゆうより、光文字石も古代において神として、太陽神としてあがめられていたのかもしれない。

④ 甲斐酒折宮考

酒折宮を論ずる前に、まず『古事記』と『日本書紀』を、特に『古事記』を論じなければならない。『古事記』は、『日本書紀』もそうだが、この両書が書かれた当時、日本にはまだ文字がなかったので、すべて中国文字、漢字で書かれたのである。といっても中国文ですべて書かれたのではなかった。もちろん説明文はすべて中国文である。しかし歌の部分はこれはそうとう多いが、漢字の音を利用して日本語を書いたのである。したがって、この漢字は中国人には皆目わからないはずである。もう一つ中国人にわからない漢字の利用法がある。それは主として生物などのよみ方である。牛の字を「ウシ」と読むなどである。

さてわたしがこのような字の説明をしたのは、『古事記』の漢字の表記を問題にしたからである。『古事記』では、といっても漢字の原文ではということだが、「ヤマト」とは「夜麻登」と書いている。これ以外にはヤマトの漢字は見られない。ただ『日本書紀』では「ヤマト」と歌では「夜摩苔」と書いているが、説明文では「ヤマト」は「日本」になっているのである。これは次のような説明が『日本書紀』の中にあるからである。

冒頭の国生み神話のところである。

大日本・日本、これおば耶麻騰と云ふ・下皆此に效へ。
シモミナコレ なら

日本はヤマトという。これからであるすべての日本はすべてヤマトである。『日本書紀』では「ヤマト」はすべて「日本」にするときめたというのである。

もう一つ字音をきめた説明があるのでここで紹介しておく。その字は「倭」の字である。岩波の『古事記』『日本書紀』といえ、その中では「倭」の字音はすべて「ヤマト」になっているが、『日本書紀』の「倭」の字音の説明は次のようになっているのである。

仍りて日の少宮に留り宅みましきといふ。少宮、此をば倭枸美野という。
よ といしま す わかみや

「倭」の字を「ワ」と発音せよというのがこの註である。『古事記』でも『日本書紀』でも「倭」の字はたいへん多い。日本語の『古事記』や『日本書紀』では「倭」の字をすべて「ヤマト」としているが、『日本書紀』の原文ではこのように倭をワと発音せよと定めているのである。

したがって、『古事記』の倭建命はワタケルノミコトであり、『日本書紀』の日本武尊はヤマトタケルノミコトである。

ここで甲斐酒折宮問答歌のもう一つの問題にふれておくことにする。それは大和の天皇家がどうして天皇家と対等に問答を交わす相手として甲斐国を選んだかということである。

その答えは、『古事記』でも『日本書紀』でもその漢字で書かれた原文にあるとわたしは信じている。

原文では「ヤマト」は「日本」をはじめとしたさまざまの字で書かれている。少なくとも「大和」では書かれていない。ところが「カイ」とは原文でも「甲斐」と書かれているのである。ということは酒折宮問答歌がおこなわれた時代、景行天皇の時代ということだが、すでに甲斐という国が存在していたことをしめしていたことになる。もっともその王国が大和に相当するものだとすることは酒折宮が示しているのである。『古事記』も『日本書紀』も「宮」という住居は、たとえば神武天皇の住居を高千穂

宮というように、天皇の住居である。少なくとも『古事記』や『日本書紀』の作者は当然のごとくそう考えて、酒折宮と書いていたはずだ。

さてここで、わたしが書こうとした主題に入ることにする。それは酒折宮問答歌の結論についてである。もちろんそのためには、酒折宮問答歌について説明しなければならぬ。が、そのためには、わたしの酒折宮問答歌を説明しなければならぬ。というのは従来の酒折宮問答歌の説明、これは岩波書店の『古事記』や『日本書紀』の酒折宮問答歌の説明で、ヤマトタケルノミコトが酒折宮までいく日かかったかわかるかときき、それにミヒタキノオキナが九夜十日ですと答えたというのがこの歌の説明である。この説明がおかしいのは、酒折宮へやってきたのはヤマトタケルノミコトである。したがって、ヤマトタケルノミコトがそんな質問をするわけがないのである。

それにこの問答歌は原文を見ると漢字で書かれているのである。漢字の問答歌を見るとそんなふうには書かれてないのである。どのように書かれていたかは、わたしの前の論文で詳細したので、それに、ここでは問答歌を論じるわけではないので、わたしの結論だけを説明して先に進むことにする。

ヤマトタケルノミコトはミヒタキノオキナに、わたしはいくつの国を征服したかわかるかとたずねた。それに対しミヒタキノオキナは、すべての国ですと答えたというのである。

その答がよかったというので、ヤマトタケルノミコトは、『古事記』の中で次のように答えたというのである。

是を以ちて其の老人おきなを誉めて、即ち東の国あずま くにのみやつこ造を給ひき。

ここでいう老人とは、御火焼之老人のことで、御火焼之老人とは酒折宮の主人、すなわち、甲斐国の当時の王である。その王さまが戦かわずして大和に降服したというので、甲府盆地の東側の丘陵地帯の国の政治をまかされたというのが、前の論文である。国造というのは、古代においては国王のことである。

いずれにしろ、甲斐には塩があった。古代にあっては、塩が古代の国をつくっていたことは、塩の専売で漢という中国が作られたことでもわかるであろう。甲斐という国が塩があったので、大和はなんとしても甲斐という国ではなく、甲斐の塩が欲しかったのであろう。

ただこの文からわかることは、甲斐国というのは、「埤」という文字からもわかるように完全な独立した国の時代と、大和王朝に支配された国の二つの面をもった古代の国だということである。

⑤ 甲斐星石終考

わたしが星石の論文を書こうと思ったのは、星石の右側に字が、それも四文字ずつ漢字で二行彫まれているの気がついたからだ。しかもその字は、一行目が人目をはばかるように小さく、二行目が大きいのだ。石に彫まれた文字で、こんな差のある文字をわたしは見たことがない。その上、この星石の左側には絵が、それもなんとも奇妙な絵が彫まれていた。奇妙というのは太陽と月が、しかもその月が、三ヶ月が並んで彫られているのである。そしてこの文字と絵の間に、小穴が二十七彫られているのである。星石の名前はここからきているが、もちろん、この星石の中心はこの小穴が中心ではなく、字と絵が中心である。小穴はその字や絵がわかつてはじめてわかるのである。

その甲斐の古代に字であるのは、赤鳥元年銅鏡である。おそらくこの銅鏡は赤鳥元年、二三八年に作られたものなので、甲斐にある文字としてはいちばん古いものかもしれない。

ただ数が多いといえ、酒折宮の背後にそびえている御室山にある石文字である。今では埤と光と境しか読みとれないが、その他に字の跡だと思われるものがいくつも認められる。

古代甲斐人が中国の字、漢字を読んだり書いたりできたというのがわかるのは『甲斐国志』にその記述があるからである。

そこには、古代甲斐には学校が存在していたと書いてあるのである。その学校では生徒が学んでいたし、典籍もそろっていたと書いてある。ただし生徒がなにを学んでいたかは書いてない。ただ文字のない古代のことである。だとすればすでに中国の影響を受けていた古代甲斐のことだ、文字を、といったも中国の文字、漢字を学び、その文字を使って中国文を書いたり、中国字の字音を利用して日本文を書いたりすることを学んでいたにちがいない。

ここまでわかれば星石の二行の文に挑戦できることになる。その二行の文をあらためて書くと次のようになる。

一流禪道

八百万神

しかもこの二行の字は、もちろん漢字だが、八百万神の方がどうどうとしており、どちらかというという意味ありげで、一流禪道の方が八百万神に気をつかって肩をすくめているように見える。これは石に彫られた字である。石に字を彫ったことというものは、もちろん常人のすることではない。ましてそれが二行の文になっているのである。そんな必要があるのは、その地域の国の王しか考えられない。

だとすれば、この地域の古代の国王にふさわしいことばが、この二行の石文字だということになる。だとすればその答えはといえば、八百万神にまず目がいく。

八百万神といえ「ヤオヨズノカミ」と読まれているが、別にそんなに多くの神がいるわけではなく、ただ大ぜいの氏族という意味に使われているのである。使っているのは『古事記』である。次のように使っている。

故、天照大御神出で坐しし時、高天の原も葦原中国も、自ら照り明りき。是に八百万神共に議りて…

この文は、天照大御神が天の石屋戸から出て、高天の原で八百万神がよろこんで出むかえて、これからどうしようか考えているところを描いたものである。

さてここまでわかれば、星石の次の文は、まさにこの文そのものだとわかる。

一流禪道

八百万神

甲斐国は大和の天皇家が、ヤマトタケルノミコトが、甲斐の酒折宮に、つまり甲斐の王宮にきて、戦わずして甲斐王が屈服した時、その一族は、つまり甲斐の八百万神は絶望した。それは天照大御神が天の石屋戸に入り、八百万神という天照の一族が絶望したのとそっくりだ。しかし甲斐王の御火焼之老人は、その一族、八百万神がいろいろと手を打ち、東の国造になることができた。おそらくヤマトタケルノミコトが、御火焼之老人につかえている一族が、あまりに甲斐の国王に忠実なのに気がついて、星石の残存していた東側の地域、『古事記』ではただ東といった国の支配をまかせたにちがいない。

したがって、一時、国王でなくなった甲斐国王は一族に支えられて、八百万神に支えられて、星石の残存した東側の国の王となった。

しかしこの王は、従来の王とちがいが、というのは酒折宮にヤマトタケルノミコトが進入してきたので、それまで独立国の甲斐国王だったが、ヤマトタケルノミコトに戦わず屈服したので、その時点ではただの老人になってしまったが、甲斐の一族に支えられて、どうにか星石の残存した国の王となった。したがって、王だといっても、大和王朝に頭を押さえられていただけではなく、甲斐の一族にも頭をおさえられていたので、石に自分のことを、王という字を、堂々と彫るわけにはいかなかった。

これは当然のことだが、八百万神とあれば『古事記』ではその前にくることばは天照大御神である。したがって星石でも同じである。八百万神の前にある一流禪道は、この国の天照大御神である。

一流というのは最高という意味である。その次にある禪という字は禪讓、天子が位をゆずることに用いられていることとわかるように、国王のことである。道というのは、存在していることである。

したがって、一流禪道とは、最高の国王がこの国に存在していると石文字で甲斐の国王がしるしたのである。だが一族にささえられて国王になっているので、一族に、八百万神と敬意をはらって、自分の尊大さを誇示するのではなく、一族のりっぱさを示すために、八百万神の方をりっぱに描いたのである。あるいは、東に、東側に移された甲斐国は、その国の支配者は実質一族だったのかもしれない。

ここまでくれば、もう星石といわれた中央にある小穴の説明はする必要がないだろう。実権をにぎっている一族を中央の小穴としてえがいたのである。

最後に奇妙な絵、太陽と月が、それも三ヶ月が並んでえがかれて絵の説明である。この絵も、国王とその国王を支えている一族をえがいたものだと考えなければならない。同時にこの絵も天照大御神を描いていると考えなければならない。なにしろ天照大御神は太陽神そのものであると同時に、星石を作った甲斐の国王そのものだからである。

わたしは古代において次の『古事記』の文がかなり普及していたと考えているが、いづれにしろ、それが星石に刻まれている太陽と月になったと考えている。

是に左の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、天照大御神、次に右の御目を洗ひたまう時に、成れる神の名は、月読命。

この目の主は伊邪那伎命だが、おそらく古代人は、昼と夜を同一のもので、昼が、つまり太陽で、夜になると月になると考えてたふしがある。だから太陽と月が左と右の目にとえられたのである。このように太陽と月を並べてえがいたのは、それも三ヶ月とえがいたのは、まるいのが太陽だと示すためだからにちがいない。

いづれにしろ、この絵は太陽が天照大御神でこの国、東に移された甲斐国の王が中心の国でありということを示したものであろう。

最後にひとことそえると、わたしは甲斐王朝と対立したり、甲斐王朝を征服した国を大和としたが、この大和は元平室字元年以降使われた国名だとされていたが、わたしはそれ以前でも大和天皇家のように使っている。その時代に応じて「ヤマト」を変えるのは、読みにくいと思ったからだ。

さてこの論文を終るにあたり、わたしがいいたいのは、わたしが論文を書こうと思った時と、書き終わったときでは結論がまったく別なものになってしまったと、少なくともわたしがここに書いたように一つにつながっていなかったと述べてペンをおくことにする。

参考文献

甲斐国志（上・中・下）

古事記

日本書紀

先代旧事本紀

梁塵秘抄

塩鉄論

魏志倭人伝（三国志）

甲斐路季刊NO. 43 山梨郷土研究会